

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名 ソン ミンジョン

ソン・ミンジョン氏の博士論文「Talmy の類型論から見た日本語と韓国語の様態表現—複合動詞を中心に—」の審査結果について以下に報告する。本稿は、Len Talmy が提案した事象構造の言語化についての理論的枠組みから出発し、日本語と韓国語における移動の言語化手段を詳細に分析した研究である。論文は全部で5章からなる。以下にその内容を要約する。

第1章「はじめに」では、Talmy による動詞枠付け型言語 (verb-framed language) と衛星枠付け型言語 (satellite-framed language) という移動事象の語彙化に見られる類型化が導入され、研究の目的が示されている。[位置変化+経路+様態+図+地] という移動事象の概念的な構成要素のうち、英語などは様態が語彙化される傾向が強く、日本語は経路が語彙化され、様態は他の統語的要素、例えば副詞句で表現される。韓国語も日本語と同じ類型に属すると考えられてきたが、本研究では日韓両言語の対照分析を通じて Talmy の類型化を再検討し、韓国語に特徴的な言語化方略が見られる理由を明らかにするという目的が示されている。

第2章「先行研究」では、Talmy の類型を整理し直し明確化したうえで、それを修正、拡張した諸研究がまとめられている。その一つが、印欧諸言語の研究ではしばしば見落とされてきた直示動詞の位置づけに関する議論であり、直示動詞を有する日韓両言語に基づいた研究は、この点について興味深い貢献をなすうることが主張される。その後、日韓両言語の対比をもとに本稿で検証対象とする点について説明がなされる。

第3章「調査の概要」では、韓国語の動詞形態論の概要が述べられた後、データの解説と分析の基準が示されている。本稿では英語小説の日本語および韓国語への翻訳を基礎データとして採用し、パラレルコーパスからの用例採取に基づいた分析を行っている。主な調査結果は次のようにまとめられる。第一に、自律移動については、日本語、韓国語ともに様態が非主要部で表現されることが多かった。この点は英語との大きな違いである。第二に、使役移動については、使役の様態すなわち働きかけの手段が英語では主要部、日韓両言語では非主要部で表されるという特徴は見られるが、使役手段の言語化される頻度は自律移動における様態よりも高い傾向があることが確認された。

第4章「考察」では、前章で提示された分析結果に基づいた、より深い議論にあてられ、複数の意味論的・語用論的要因の相互作用が詳細に論じられている。

4章第1節は自律移動の様態表現の分析にあてられている。自律移動表現では、様態概念が日本語、韓国語ともに非主要部で表される。前章ではこの事実をデータに基づいて確認したが、本章では形態論上の非主要部が、テキスト中ではさまざまな機能をもって生起していることが示される。第一の機能は、事象の連続性の表現である。この場合、継起的事象を表す場合には、形態論的には非主要部であっても連鎖を構成する節の一構成部分となっているため、談話構成の観点からは主節に対して結びつきが弱くなっているとは言い難い。次に、日本語、韓国語において非主要部によって表される様態概念が一般的なものである事例が報告されている。すなわち、両言語では英語のように細かい意味の違いをもった様態動詞が豊富でないため、語彙構造において様態動詞は一般的な性質をもったものが相対的に多い。調査したデータにおいては、英語原文の個別性の高い様態が日本語、韓国語では一般化された中立的なものとなり、語彙的な複合述語前項として現れる事例が示された。それらは談話構成においては節の連鎖ではなく、主節として主要な出来事を表す文で使われており、その際には移動にとって様態概念の精緻化は動機づけをもたないという説明を著者は提示する。第三に、動作の様態そのものが談話構成において重要である場合、例えば登場人物の性格付けなどに寄与している場合は、中立的な様態ではなく、オノマトペによる英語との対応付けや、移動の意味要素を含まない様態動詞を使用していることが指摘された。このような場合、様態概念は語彙的な複合述語の一部としてではなく、統語的な複合形や日本語のナガラのような同時進行的従属節が用いられるという傾向が見られた。

4章第2節は使役移動の様態表現の分析にあてられている。まず、自律移動と同じく、事象の連続性が表される時は、節の連鎖という形がとられるため、主節の動詞に対しては同格的な関係であり、結びつきが弱いとはいえない。次に、著者は継続操作型と開始時起動型という分類を導入して、使役移動をさらに詳しく考察している。なお随伴運搬型については、英語の *take* と対応する日本語の「つれて行く」に見られるように、使役部分が翻訳において複合述語の前項で表された場合、後項動詞が直示動詞となることがしばしば見られた。直示動詞は自動詞なので、英語に見られる他動的な使役の意味が日韓両言語では対応しない。継続操作型については、英語でも比較的多く見られ、日本語、韓国語への翻訳においても見られる。この場合、使役移動の概念は複合述語の前項が使役的手段、後項

が移動となって現れる。使役的手段はそれ自体位置や状態の変化を含まない、活動動詞が用いられる傾向があり、このような対応のあり方は日本語、韓国語の使役移動を特徴付ける興味深い側面である。さらに、活動動詞が使役移動と解釈可能な場合は、経路概念の表現なしに現れる場合もある。一方、開始時起動型では、着点が日本語、韓国語で明示されない場合がしばしば見られ、このような場合、やはり経路を表す言語形式なしで、使役移動が主動詞として現れる。以上のように、移動様態が非主要部で現れる傾向が一貫している自律移動に対し、使役移動における移動手段の言語化にはより大きい多様性が見られることが明らかになった。

第5章「まとめと今後の課題」は全体の振り返りと展望にあてられている。

#### 【以下会議にて報告用】

本論文の学術的意義は、第一に Talmy の枠組みをもとにパラレルコーパスを用いて行われた丹念な対照言語学的分析を通じて、日韓両言語における移動事象の言語化の詳細を明らかにしたという点である。Talmy の出発点となった研究では、経路概念が形態論のどの部分で実現されるかを中心として言語の比較が行われた。本稿では多くの部分で素描的なものにとどまっていた Talmy の様態に関する分析を拡充した点は高く評価できる。第二に事象の言語化において、語彙構造の特性に注目するにとどまらず、文全体の構造と関連づけつつ、事象の継起性、背景化、伝えられる情報のレベル、使役手段の下位区分などといった要因に目を配りながら分析を深めたという点も評価に値する。これらの要因の相互作用によって事象の言語化の選択がなされるという主張は、この分野に新たな知見をもたらすものである。

審査においては、活発な質疑応答が行われた。英語、日本語、韓国語それぞれの例文の細部にわたる検討が行われ、本稿の主張の改訂の可能性について示唆がなされた。また、対象とする構文において、形態論的な観点と統語的な観点の使い分けについて部分的に再検討が必要であるとの指摘があった。本稿は語彙化の類型から出発し、レトリカルな「好まれる言い回し」の対比へと視野を広げたという点は特に高く評価された。

以上、本論文は認知言語学において多くの成果が生み出されてきた語彙化の類型研究に新たな視点と知見をもたらすものであると言える。審査の際には一部についてさらなる調査と考察が望まれる点が指摘されたが、それらは本研究の進展の可能性と方向性を示唆するものであり、その学術的意義をそこねるものではない。語彙化の類型研究の応用可能性

を多くの貴重な知見とともに示した本研究は、学術的価値がきわめて高く、この分野における優れた研究成果であると判定する。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。